先生のためのアウトリーチ

# 色々なものの繋ぎ目になる「音楽」という知恵 —— 多様な価値観との出会い

山本 美紀（青山学院大学教育人間科学部 教授）

コロナ禍中の2021年から始まった神奈川県立音楽堂（以下音楽堂）による「先生のためのアウトリーチ」は、先生方を対象としたアウトリーチを行うことで、参加した先生方を通してより多くの子ども達に音楽の持つ力や素晴らしさを伝えようとする、音楽専用ホールとしては他に類を見ないものである。音楽堂としては、まずは先生方に何よりも音楽の楽しさや力を実感して欲しいという思いがある。実際、参加された先生方は、ワークショップ形式で行われる活動を通して音楽を楽しみ、音楽による協働を体験し、集まった先生方同士のコミュニティーの深まりを経験しておられるようである。まさに、「先生のためのアウトリーチ」では、先生方ご自身が「楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う」（『小学校学習指導要領』第1学年及び第2学年の目標より）ことを実践されているわけである。

とはいえ、「先生のためのアウトリーチ」は音楽専門機関である音楽堂が提供するプログラムであるから、音楽科教育をより豊かな展開へと促すヒントを提供するものである。今回の「音遊び・音楽づくり編」の講師、宮内康乃氏が「色々なものの繋ぎ目になる『音楽』—中略ー〔音楽は〕私たちがずっとつないできた知恵」と語る通りだ。そのように「先生のためのアウトリーチ」を受け取るならば、ここで扱われているものは、必ずしも「音楽科授業」に留まるものではないことに気づかされる。

一方で、音楽科授業の実践に悩みながら日々奮闘している先生方にとって、「先生のためのアウトリーチ」での気づきや学びを、授業にそのまま活かすことを期待されることは困惑することに違いない。プロのアーティストにとって自明のことが、一般的には全くそうではないということはよくあることであり、逆に、教師にとって当たり前のこと（例えば学習指導要領があり、授業が「目標」「評価」で構成されることなど）がアーティスト側には全くそうではないことは往々にしてある。教師とアーティスト、それぞれがプロでありその持ち場もそれぞれである以上、両者を繋ぐことは、「先生のためのアウトリーチ」に今後一層求められるものであろう。

初期のアウトリーチ活動では、「とにかく本物に子どもが触れることは良いことだから、プロによる芸術活動が学校で実施されることは有益だ」と単純にとらえられていたように思う。しかし、インターネットが世界中のあらゆる表現活動を瞬時に共有する今日にあって、「本物」は多様な価値観の下であらゆる形で存在しており、むしろ「個人が選ぶ」ものになってきている。学校教育における音楽科での重要な学びには、一定の評価で価値を決めつけることではなく、価値の多様性を身をもって知ることがある。だからこそ、音楽専門機関として音楽堂が提供するアウトリーチは、教育現場のニーズを汲みつつも、重層化する世界を生きる子どもたちに、「本物」やそれを「選ぶ」とはどういうことなのか問いかけるものでありたい。